

日本原子力学会 第 133 回倫理委員会
議事録

1. 日 時：2022 年 9 月 29 日（木）15:00～17:35
2. 場 所：Web 会議
3. 出席者：大場委員長、福家副委員長、神谷幹事、伊藤委員、金谷委員、菅原委員、手柴委員、
中野委員、中村委員（委員 13 名中 9 名出席）
岩城特別委員

4. 資 料：

- 倫 133-1 前回議事録（案）
- 倫 133-2-1 倫理委員会活動計画
- 倫 133-2-2 倫理委員会役割分担表
- 倫 133-3-1 2022 年秋の大会企画セッションに係る企画・準備について
- 倫 133-3-2 2022 年秋の大会企画セッション議事概要
- 倫 133-3-3 2022 年秋の大会倫理委員会セッションアンケート結果
- 倫 133-4-1 倫理規程制定 20 年シンポジウムの開催報告
- 倫 133-4-2 倫理委員会 20 年シンポジウムアンケート結果
- 倫 133-5 倫理委員会の企画セッション等（2018 年～）
- 倫 133-6 研究機関の安全文化醸成活動について

5. 議事概要：

(1) 前回議事録について

神谷幹事から資料 133-1 に基づき説明があり、異議なく了承された。

(2) 活動計画および役割分担について

福家副委員長から資料 133-2-1、133-2-2 に基づき説明があった。主な確認事項等は以下のとおり。

<活動計画>

- ・今後の年会・大会のスケジュールを追記する。企画セッションの提案締切り、予稿締切り等の主要スケジュールも記載する。
- ・20 年企画の学会誌連載企画の原稿はすべて完了した。

<役割分担>

- ・2023 年春の年会企画セッションの分担については、これまでのところ立候補がない状況。
- ・役割分担は、一部の委員に負担がかからないようにという観点で決めてきているので、分担の回し方も含めて、考えたい。

(3) 2022 年秋の大会企画セッションについて

神谷幹事、伊藤委員から資料 133-3-1～133-3-3 に基づき、秋の大会企画セッションの実施結果、

アンケート結果等について説明があった。主な議論は以下のとおり。

- ・委員会大ですでに共有済みだが、招待講師への謝金等の支払いについてはメール審議で了承された。
- ・座長である菅原委員の最後の「より包摂的なかたちでの委員の構成」との発言は、それほど委員会の現状の構成を問題視しているわけではなく、メーカ、電力、研究所等から安定的に委員として参画している現状は重要であるが、ただ、例えば品証部門の方が職務として代々携わられるというスタイルに加えて、企業内でも異なるポジションの方が委員になったり、外国籍の方、あるいは会員としては少ない組織（自治体、商社等）から委員を求めるのも一案ではないか、との趣旨であったとの補足があった。
- ・原子力の専門家の側が一般の人をリスペクトすることが必要との意見に関しては、どのような業務に従事しているかにもよるのではないか。
- ・例えば、設計部門だと一般の人からは遠いので、ご意見のようにはなり難いのかも知れない。JR 東日本の事例が研究会であったが、JR は顧客＝一般の人で近い関係と意識できているのではないか。
- ・原子力の側は情報を発信することにこだわり過ぎている面があるのではないか。
- ・対話とか、社会からの問い掛けに応答していくことの重要性は、現在の倫理規程では埋め込まれているものと考えている。

(4) 20 年シンポジウムについて

福家副委員長から資料 133-4-1 及び 133-4-2 に基づき説明があった。主な議論は以下のとおり。

- ・パネリストによる充実した議論により、有意義なシンポジウムであったと言えるのではないか。
- ・運営上も、一部のパネリストの通信状況が少し乱れたときがあったが、大きな支障はなかった。
- ・詳細な議事録については、現在文字起こしベースで作成中。学会誌への投稿も学会編集委員会に提案済みで、10 月 20 日原稿締切りで対応する。
- ・議事概要、講演資料については、倫理委員会 HP で公開する。HP 公開の準備が整えば、会員メールや会友メールで周知することがよいのではないか。
- ・シンポジウム当日にチャットで寄せられた意見への回答については、パネルディスカッションの中で概ね取り上げているので、個別の回答などは作成しないこととする。

(5) 2023 年春の年会企画セッションについて

大場委員長から資料 133-5 に基づき説明があり、企画内容についてアイデア出しを行った。役割分担を早急に決めて、次回委員会までに詰めていくこととした。

- ・先の秋の大会での会場との議論を踏まえると、経営者の倫理とか、経営者を支える倫理など、経営者をキーワードにして企画してはどうか。
- ・政府の GX 会議などで原子力にフォローの動きがある中で、原子力の側の倫理と世の中一般の倫理の違い、ずれは何かを問う企画はどうか。世の中に原子力を問うために原子力の側の倫理観はどうあるべきかなど。
- ・研究機関の安全文化の議論もしているが、一括りに安全文化といっても、技術者と研究者では

異なる。この委員会内でもずれがあるのだと思う。

- ・時節柄思うのは、ドイツが「倫理委員会」での議論に基づき脱原発を決めたことが、めぐりめぐってウクライナの戦争にいくらかでも影響したのかもしれないと思うと、ある時点での「倫理的」な判断がどのような影響をもたらすのかという作業を、どこまで掘り下げるべきなのか、ということ自体を reflexive に考えなければいけないという思いもある。
- ・組織のトップから、建前ではなく、社員をどう見ているか、相手をリスペクトする観点からどう行動しているかの議論はどうか。どう行動し、成果をどう評価しているかを座談会的にざっくばらんにできないか。
- ・心理的安全性の観点から、経営層がどう見ているか、どう取り組んでいるかを聞くのは有意義ではないか。
- ・昨今もメーカーの不祥事案を見ていると、技術者倫理が疎かになっている面があるのではないか。不祥事を起こした会社では、社内改革委員会や第三者委員会を設置して取り組むのが基本の流れになっている。組織を横から、第三者的に見ていくことの重要性があるのだと思う。

(6) 研究機関の安全文化について

伊藤委員から資料 133-6 に基づき説明があった。主な議論は以下のとおり。

- ・資料のまとめの尽力に敬意を表する。このようにまとめるのであれば、企画セッションや研究会での発表、あるいは学会誌へ掲載していくことを考えてよいのではないか。担当グループで検討を進めて欲しい。

(7) その他

- ・中野委員から、技術倫理協議会の状況について共有があった。
 - 最近の開催状況 8/26、9/28、10/24（予定）
 - 技術倫理協議会 第 18 回公開シンポジウムについて審議中
- ・岩城特別委員から、以下の発言があった。
 - 9 月 10 日シンポジウムに参加して、倫理規程の浸透は重要な課題と認識した。
 - 外部への発信について、ポジションステートメントの活用なども工夫していけるとよい。

6. 次 回：10 月下旬から 11 月上旬の開催として、別途調整することとした。

以上